

---

## ホモ・サピエンスは手形好き アルゼンチン「手の洞窟」

ホモ・サピエンスの創作の痕跡として、これまで多くの手形が発見されている。古くは3万9900年前にインドネシアのスラウェシ島で描かれた手形、3万7300年前にスペインのエルカスティヨ洞窟で描かれた手形など。現在でも出産記念に赤子の手形を残したり、著名人の手形が色紙で売られているので、人類は大昔から今に至っても手形が好きなようである。

サピエンスは、やがて1万6000年前にベーリング海峡を渡って北米大陸に足を踏み入れ、わずか3000年という期間で南米大陸末端まで到達した。250万年前にホモ属がアフリカを出発してようやくサピエンスがユーラシア大陸に達した歳月と移動距離を思えば、この3000年での北米 - 南米大陸縦断は駆け足としか例えようがなく、何をそんなに急がせたのかよくわからない。

当時の南北アメリカ大陸は、アフリカやユーラシアでは見られない野生動物たちのパラダイスでもあり、大型動物では全長6mの巨大なナマケモノ（メガテリウム）、巨大な犬歯を持つネコ科のスミロドン、体長3.5mのネコ科最大のアメリカライオンなど、ワクワクするような動物たちが棲息していた。しかし、サピエンスがアルゼンチン末端に辿り着く頃には、それらの大型動物が消滅してしまった。オーストラリア大陸の巨大有袋類ディプロドンや巨大カンガルー、ニュージーランドの巨鳥モアなどと同じく、人類の捕食対象とされて絶滅させられたのであった。

写真はアルゼンチンの南端パタゴニア地方に描かれた手形で、9000年前に描かれたものだ。この洞窟壁画は数多くの手形で埋め尽くされているところからクエバ・デ・ラス・manos（手の洞窟）という名前で呼ばれている。手形がほとんどが左手である理由は、右手に持った骨製のパイプで染料を吹き付けたためとされている。また手形のサイズが現代人よりも少し小さいのは、聖なる成人通過儀礼として手形を残す風習のためとも推察されているが、本当のところはわかっていない。この手形表現には、ベーリング海峡を渡って北米から南米末端に達したサピエンスの喜びとか勝利とかをも含まれているように感じ取れるのである。

このような手形が洞窟内壁面のあちらこちらを覆い尽くしており、これを人類の残したパターンコレクションの一つに数えて、ここに取り上げたい。



<https://ja.wikipedia.org/wiki/クエバ・デ・ラス・manos>

---